

## 対等であるとはどういうことか

吉田憲司×佐藤仁×岩田泰×佐野真由子

佐野

本日はお集まりいただきましてありがとうございます。万博学研究会で年一回の定期刊行物を創刊する、という挑戦をすることになり、その創刊号の特集を「植民地なき世界の万博」に決めました。十二年にわたって共同研究を重ねてきたなかで、いま、第二次世界大戦後の万博に新しい光を積極的に当てていきたいと考えています。

戦後万博史の最大の問いは、万国博覧会はいかにして今日の姿になったか、ということだろうと思っています。長く万博研究の中心であった一九世紀から二〇世紀前半の万博は、帝国主義を加速させる装置となつたといわれてきました。それに対して、今日一般の方々がおそらく普通にイメージする万博では、各国の展示が仲良く並んでいます。このギャップに、実は誰も目を向けてこなかったのではないかと。では、その間のいちばん大きな構造変動は何であったかというところ、第二次大戦後に進んだ植民地の独立であり、万博という舞台から植民地展示がなくなったことではないか。考えてみれば、一九世紀以来の万博における植民地展示を批判する研究は数多く出てきましたけれども、では万博からどうやってその植民地展示がなくなったのか、という研究はなかったのですよね。そこを、この『万博学／Expo-logy』創刊号の特集テーマにしたいと考

えました。

歴史的に世界の不公平を表現してきた万博というものが、少なくとも表向きは、むしろ公平さを表現する場になろうとしているように見えるわけです。今回の特集で意図しているのは、まず、その変貌を掘り返すことです。しかし、国と国、あるいは人と人、文化と文化が対等であるということを願いながらも、実現するのは非常に難しい。その難しさにしっかりと目を向けたいと思いました。その特集の締めにかけていただくべく、この座談会を企画いたしました。まず、文化人類学者としての長年のフィールドワークを通じて、そして世界の博物館界を率いて、文化の展示がどうあるべきかを考えてこられた吉田憲司先生、それから、この座談会には万博とはこれまで縁のなかつた方をお迎えしてぜひ一緒に話したいと願ひまして、佐藤仁さんにお越しいただきました。佐藤さんは、文化人類学と国際関係論のバックグラウンドをお持ちで、学際的かつ実践的な研究を展開しつつ、私の言葉で紹介させていただくなら、「人文知に支えられた開発研究」をつくっていくこうとされています。岩田さんは、この研究会の最初期、ちょうど二〇一〇年上海万博のときに経済産業省の博覧会推進室長でいらつしやうって、研究会の活動のごとで相談にのつたのですけれども、結果として仲間に引つ張り込んでしまいました。それ以来一〇年以上、一緒に活動しています。本書の編集チームのメンバーでもあります。いまは、二〇二五年大阪・関西万博を主催する博覧会協会の要職に就かれています。



## 「植民地なき世界」の植民地問題

佐野

対等であることがいかに難しいか、という問題に切り込んでいきたいのですが、ひとつの事例として、万国博覧会の「共同館問題」と私が呼んでいるものを取りあげたいと思います。共同館とは、一九六〇年代に多くの植民地が独立し、初めて「国」として万博に参加しうるようになったとき、経済的に自国のパビリオンを建てられない国々を助けるために、アパートメントのような建物を主催国側で用意し、そこに共同入居してもらったというものです。これによって途上国も参加しやすくなりました。研究の過程で、一九六七年のモントリオール万博のとき、カナダの主催組織が、新興独立国を迎えるということを積極的に意識して、共同館を設営したことが見えてきました。その後、これは万博の善意を示す新しい伝統となったわけですが、

しかし、実際に開催されている万博を自分の目で見るなかで、疑問を感じるようになりました。これは、経済的に豊かではない国々への親切として行われているかもしれないけれども、まとめて共同館に入ってもらうことは結局、かつて植民地展示の対象となっていた国々の看板を掛け替えただけで、依然として弱小諸国だというスタンプを繰り返し押し返していることにならないだろうか、そろそろ違うやり方を考えるべきなのではないだろうか、と考えるようになったのです。どこかでそういうことを話し合う機会はないかと思っていた折、経産省の二〇二五年万博に向かう初期の検討委員会で、私は委員として出席していたのですが、本書にもご寄稿いただいているウスビ・サコさんがゲストとしていらつしやって、ほとんど同じことおっしゃったのです。ご自身がアフリカ出身でいらつしやる立場から、共同館というのはかつては親切であったかもしれ

れないが、これは隠された、あるいはむしろ明示的な、現代の万博に残された差別の構造であるという発言をなさいました。やはり、という思いで受け止め、さらに問題意識を深めることになったのです。このことは、二〇二〇年に当研究会で出した論集『万博学』のなかの私の論文にも書かせていただきました。共同館というものが歴史的に重要な役割を果たしたことは事実ですが、こうした矛盾を孕む存在である……そのあたりからお話を始めていきたいと思っています。

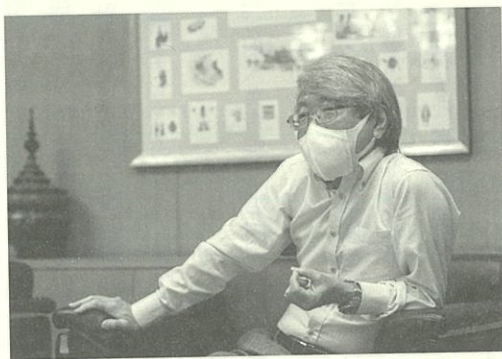
植民地展示というのが姿を変えて残っているというのは、つくづくそう思います。それだけに、今回の特集のタイトルがね、私にはどうも違和感がある。「植民地なき世界」にかぎかつこがあるかなと。

佐野

あ、なるほど。

吉田

博物館の世界でも、三年前の二〇一九年に国際博物館会議（ICOM）の世界大会を京都で開催した時に大きなテーマになったのが、ディコナイゼーション（脱植民地化）でした。それが話題になること自体、実は植民地状況というのは、博物館展示においてもまだ変わっていないことを表しています。それをいかに脱植民地化していくかというのが、とくに旧植民地の国における博物館の課題で、それは博覧会も同じなのだろうと思います。確かに多くの植民地は独立したし、植民地の多くはなくなっただけけれども、実態として植民地経験、植民地統治というものの残滓が残っていることを否定できないと思うのですね。



吉田氏



たとえば公用語、これはやはりアフリカを見てもイギリスが統治国だった植民地は英語だし、フランスが統治国だったところはフランス語です。教育の自身を見ても、それぞれの国の文化や遺産を教える枠組が途上国にはなかった。だから文学部の講義でシェイクスピアを教えても、その国の口頭伝承は大学でもまったく教えられていない、そういう状況がいまも続いています。それから航空網もそう、アフリカでは隣の国なのにいったんパリかロンドンへ行かないと移動できないことがしばしばです。

航空網というのは、本当にかつての支配体系を反映しているのですよね。旧大英帝国の範囲内では便が多くて非常に移動しやすいといった実感があります。

順番に植民地を回っていくという感じですね。それだけに植民地なき世界というのはある種の幻想ですから、かつこ付きの「植民地なき世界」の万博」ということだったら腑に落ちる感じはするのです。

私は日本の行政の立場からアジアの国々と長く携わってきたのですが、アジアは状況が違うように思います。たとえばベトナムとカンボジアがフランス一辺倒かという点、そんなこともないわけです。ASEANはASEANとして、自分たちで「一〇カ国がまとまるのだ」という強烈な意思を持って、たとえば域内のフライトのコネクティビティを円滑にできました。時間はかかりましたが、かなりASEANとしての形ができてきているのです。植民地なき世界と言いつけるかは別として、アジアではだいぶ実態がその言葉と一致してきていると思いますね。

佐藤 僕は、この座談会のタイトル……「対等であるとはどういうことか」というのがすごくおもしろいなと思いました。政治哲学とか、こういう問題を正面から扱う世界では、「平等」は問うけれども「対等」という言葉はあまり聞かないのです。「対等」という日本語から想起するのは当事者性です。僕は「対等」について

こういふと思っています。つまり「平等」だと、第三者の神様のような人がいて、「いま平等でない仕組みがあるからそれをどうすればもっと平等にできるか」といったことを、やや離れた視点から見る感覚があるのですが、「対等」は、もっと当事者に近いスタンスが言葉に入っている気がします。あまり見ない問題のため方で、そのこと自体ものすごくおもしろいなと思ったのです。

その上で僕が関心をもったのは、われわれはこうやって万博を通じて「対等」を問題にしているのだけれども、途上国の人たちはいったい何を問題視しているのかです。つまりややもすると、われわれは当事者をやつちのけにして独演会をやっているのではなからかという気もするのです。やはり途上国はいったい何を求めているのかということがあって、はじめてこの議論は着地する気がするのです。

また、万博で何を求めるかということ、見る側が何を求めているのかということ、その相互作用のなかでこの対等性の問題は浮上してくると思うので、見る側が何を期待しているのかを考えることも、この話の不可欠なパーツなのではないかと思いました。

「見せかけの多様性」から価値観の多元化へ

佐野 今日ここで話している話と深く関係する「文化多様性」という概念が、現代の国際社会では尊重されていますよね。あらゆる文化は等しく価値があり、地球上に多様な文化が存在する、その状態を全体として守っていくべきであると。ユネスコの「文化多様性宣言」を読むとよくわかりますが、ここには、歴史的に対等で



佐藤 「下」に置かれてきたものを同じ土俵に引き上げようということですよ。よくわかります。

佐藤

そう、非常に色濃くそういう性格を持っているんです。文化多様性が一見美しく、しかし実はそうではないところが、そこにあると思っています。たとえば、私は二年半ほどですけれどもユネスコ本部に勤務して、無形文化遺産保護条約ができていくときにその担当部署にいました。結果として、その世界に与することはできないと思っただけです。

吉田

稼働しつつあった無形文化遺産の制度は、日本の歌舞伎や祇園祭などの事例だけ見ているとわかりませんが、世界的には、要はかつて虐げられていた文化を「すばらしいですね」「あらためてお認めしましょう」といつてスタンプを押していく作業にほかなりません。押せば押すほどそうした裏の意味というか、正体が見えてきてしまつて、その矛盾に、私は現場にいて耐えられませんでした。もちろん「文化多様性」という考え方はすばらしいのですが、そういう一見美しい政治的営為が元の歴史的な現実を本当にひっくり返すことはどうしてもできない、という実情を突きつけられる経験を重ねて、すごく悲観的になることがあります。私はアフリカでフィールドワークをして、南部アフリカのチエワという人たちと一緒に暮らして三十何年になります。これほど苦しい状況でなぜこれほど優しくなれるのだろうかと思つておぼろげに思っています。アフリカで長年フィールドワークを続けていて私が痛感するのは、自分がただ一方的に情報をもたらさばかりで、お世話になった人々に対してなんの役にも立たない存在だということです。ただ、その一方で毎年のように彼らの村へ行く私と、日本に来ることなどできない村の人たち、というその力関係というのは否定しようがないですよ。

私が博物館というものに深く関わるようになったのは、これだけ世話になった人たちに、私はせいぜい井戸をつくつたぐらいで、何もできていない。けれども博物館という装置を使えば、いま世話になっている人の孫やひ孫の世代の人々に何かお返しができるのではないか、そういう回路に博物館学が使えなかなと思つたからです。博物館のことを研究し、国際協力機構（JICA）が行う博物館の研修コースにもずっと関わっています。そういう思いがあるので、私は彼らを下に見るということがそもそもできない。フィールドでの日常では彼らの方が先生で、わたしは生徒みたいなものですから。でも、どうしても否定できない力関係というのは存在している。共同館の問題もそうなのだろうと思つていますね。

佐野

そうですね。もちろん佐藤さんも私も、人間として本当に下に見ているなどということではなくて、だからこそ、政治的ストーリーがそういう意味を生じさせてしまうことに怒りを感じています。いまおっしゃったように、歴史的な構造として、どうしようもない力関係がある。それを政治的に修正しようとして、顕彰して同じ土俵に載せようとするのが文化遺産認定の制度であるとすると、実はそれを認定すればするほど、そのどうしようもない力関係を何度も確定しなおすということになってしまう……。

吉田

その点では無形文化遺産以上に世界遺産のほうがもっと序列化の力学が強いですね。文化遺産の指定の件数を見ても明らかに北高南低でヨーロッパがほとんど。無形文化遺産というのは、それを逆転する意味合いがあったと思うのですけれど。

佐野

制度自体がそのためにつくられたのですよね。

吉田

でも結局は、無形文化遺産に認定されるかどうかというところで、さらに現地の文化のなかに序列を持ち込んでしまうという落とし穴もあります。それで私はかなり真剣に「一家にひとつ世界遺産」といつてま



わっているんです。要するに世界中を無形文化遺産と世界文化遺産で埋め尽くしてしまう以外、この力関係というのは崩せない。

岩田

ただ、遺産という言葉自身が、もうすでに先進国目線ではないですか。ミャンマーにいたときの経験ですが、あそこには僕たちから見るとすばらしい仏教遺跡があるわけですが、地元の人にとってはいまでも信仰の対象だから、遺跡ではないのです。そういう言葉遣い自体に、先進国ないしは植民地を持っていた国の価値観が入っているのかもしれないですね。

現代の万博というのは、言葉遣いや、出展する国々の間を規定する関係が、上下とか、進んでいる、遅れているとかということとは無関係で、すごくフラットな形になってくる……それをみんながうまく活用しさえすれば、「対等」ということを比較的实现しやすい制度なのかなとは思っています。

佐藤

著名な人類学者であるレヴィ・ストロースの『人種と歴史』（一九五二年）という報告書は、ユネスコの委託で、民族に上下がないということをおる種科学的に証明したレポートですが、そのなかに「見せかけの多様性」という言葉があります。たとえばラテンアメリカとヨーロッパから大昔の斧が出てきて、それを並べた時に、お互いに違いがある。ところが違いをそのままに受け止めず、一方が技術的に進んでいて他方が遅れているように見えるからといって、ひとつの軸でつないで序列化してしまうということが起こりやすい。それを「見



佐藤氏

せかけの多様性」といつているのです。いろいろなところいろいろな文化や営みがあるのだけれど、それを一元的に序列化してしまうという呪縛から我々はなかなか抜けきれない。並べたり一望したりする、そして、ある軸をもって比べたがる。こうした人間の癖とどうやってうまく付き合っていくのかというのは難しいのですが、やはり、評価軸を多元化することがポイントなのではないかなと思います。

大学ランキングなども典型的にそうですね。世界のいろいろな大学をランク付けして、それが実際に留学生の動きなどに影響する。結局、基準が一元化されて、単線的な方向にもっていかれてしまうのです。基準の複数化はどうすればできるのか、どうすれば多様なものを多様なままに正當に評価できるのかが問われていると思います。

吉田

万博は世界を俯瞰する装置として成立したから、序列化というのはそもそもその目的でした。とくに一九世紀の万博はそうでしたが、たぶん佐野さんがこれから見えていこうとしている第二次大戦後の万博には、少なくともそういう文化進化論というものを脱ぎ捨てた形で世界を並列してみようという動きはあるのかもしれないと思います。

ただ、自己と他者という区別は、人間だけではなく生物にとつていちばん基本的な世界認識の方法なのですけれど、人間の場合はどうもこれがすぐに差別につながってしまいます。これはどの時代でも全然変わらぬ。現代の万博は、世界をおしなべて広く水平に見るのだという方向へ、表向き進んでいっているのだけれど、そのなかで無意識のうちに序列化が起きているか、常に検証してみる必要があるだろうと思いますね。



「対等」を追求することの困難

佐野 吉田先生が博物館を舞台に取り組んでこられたことは、やはりそれを強く意識されたものなのでしょうか？  
吉田 「self & other」という展覧会もやりましたけど、考えると、私がやってきた展覧会は常にその問題がテーマになっているのだと思います。

佐野 私は吉田先生が長年実践されてきたことから本当に多くを学んだのですが、先生は展示の場をお持ちになって、そしてまた世界を歩きながらチャレンジを続けてこられた。そのうえで、常に検証してみるしかないとおっしゃるのですけれども、無力感を感じられることなどはないのですか？

吉田 無力感というか、さきほど述べたように、絶対否定できない力関係というものはあるんですよ。

佐野 それは絶対に修正できないのか、仮に経済的に修正できたとして、やはりどうしても、根本的には変えられないのか、どうお考えですか。

吉田 先ほど述べたように、一方的に私がアフリカに行く側だったのを、この間は村の人たちと一緒に日本へ帰ってきました。わずかながらでもそういう努力をひとつひとつ積み重ねる以外ないのではないかと思っています。だからこそ常に活動していく以外ないという感じですよ。

佐野 佐藤さんご専門の経済協力というのは、ある意味ではかなり決定的に上から目線の行為でもありますよね。

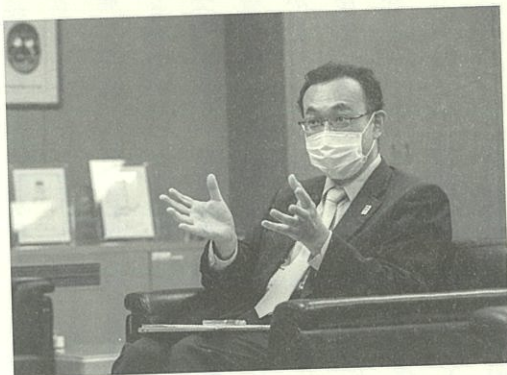
佐藤 日本の経済協力の場合は、戦後の賠償という「やらなければいけない」というところから始まって、それが

いつの間にか「援助」に化けていったので、出自が非常に特殊なのです。

ただ、基本的にアメリカやヨーロッパがやっているのを見ても、対等性をめざすというより、むしろ既得権の維持というのが大前提ですね。たとえば貧困削減を一生懸命やるのは、共産主義勢力を撲滅するとか、自分たちの役に立つからなのです。日本の経済協力も、かなりの部分は日本の民間企業に資するために行ってきたといえます。もちろんその波及効果として、現地の人役に立ったことはあったと思うのですが、基本的な建て付けにおいて、対等になろうという意識はほとんどなかったと僕は思います。

だから「対等」というのは、これは極論ですけど、やはり自分たちよりも「上」とみなすレベルへの働きかけとして意識されるのであって、「下」に降りていくという発想はほとんどないのではないかな。個人の間は別として、国家としてそういう方向に積極的に働きかけるといえることはなかったと思います。難民の受け入れも、政府開発援助（ODA）も、あくまで自分たちの既得権が守られる範囲においてなされるものです。もちろんそれには一定の理由があって、そうしないと長続きしないというロジックもあると思います。

岩田 佐藤先生が、「平等」と「対等」は違って、「対等」というのは当事者どうしの関係だとおっしゃいましたが、そうすると、開発援助では援助する側とされる側がポジションとして対等ということもそもそもないですよ。



岩田氏



吉田

基本的に救済だろうから、救いあげる側と救いあげられる側という絶対的な区別はありませんからね。

岩田

たとえばODAも当然国民の税金でやっていますから、日本だけがすぐお金を払って貧しい人たちのために井戸を掘るといふことに、国民感情的に必ずしもみなさん賛成しないとすると、ではどう日本に裨益するのかが問われるようになってきます。それがどうしても開発援助という言葉にはついてまわりますよね。

佐藤

地球環境問題では典型的にこの対等性とか平等性の問題がでてきます。つまり、先進国が温暖化だとか二酸化炭素削減だとかというけれども、自分たちがさんざん二酸化炭素を出しておいて、いままら減らせというのはどういうことか、われわれにも開発する権利はあると途上国がいうわけですね。そこで「途上国で行う環境のプロジェクトを日本が支援しますから、それを日本の二酸化炭素の削減分としてカウントしてください」という仕組みをつくったわけです。それでどんな興味深いことが起きたかというところ、これはラオスの現場を見に行ったときのことですけど、森林が豊かな、小学校もないようなところで地球環境保全教育をやるわけなんですよ。それはもちろん村人とJICAが契約したわけではなくて、ラオス政府とJICAが契約したのであって、村人からすれば急におりてきた話です。小学校もない村で、カーボンってこういうふうになっているという説明を現地のファシリテーターがする……この図式がすごく滑稽だなんて思って、こういうプロジェクトどう思う？ と村人に聞いたんです。「日本も善意でこういうことやってくれているのだから嫌だとはいわないけれども、でもやはり先にやってほしいことはある」といつていましたよ。

援助というのは、出す側の都合があるだけでなく、受ける側も、政府の考えることと現場の人びとと乖離があることは多いのです。一括りに途上国というのではなく、そのなかの多様性をどうつかまえるかが、また大きな課題です。万博のような場面で、われわれが「途上国」とまとめて呼んでしまっているものな

吉田

かのダイバーシティをどうつかまえるかは、この対等性の議論のもうひとつのテーマなのではないでしょうか。

JICAの受託事業として民博でやっている博物館研修は、毎年JICAが途上国と認定している一〇カ国から一名ずつ、計一〇人が来日して三カ月のトレーニングをするのですけど、ある時からそれを「博物館とコミュニティ開発」と名付けました。いまおっしゃったように、開発協力では日本人が考えたスキームを現地にもつていっても、それが現地の状況に合っているか十分な調査ができていないということはすごく多いのですよね。私もアフリカでそういった現場を見ました。一方で、現地にある博物館にはその地域の知識が集約されていて、ぎっしり詰まっています。だからまずそこを基地にして、そこが持っている知識をベースにしながら開発を考えてくださいということを、JICAへ行って何度も講演してきました。博物館というのはそういう装置なのですよ。しかしなかなか定着しないのです。

主体的に展示を考えること

吉田

共同館の話に戻りますけど、今度の大阪・関西万博は、とにかく敷地が狭くて、共同館がたくさんできまずから大問題だろうと思うのです。展示の内容は、日本側からテーマを打ち出して各国がそれに応えてつくっていくのですけれど、これまでの万博では、結局、途上国の多くが展示の企画・制作を依頼するのは商社、とくにその商社に入っているディーラーの人たちです。アフリカであれば、アフリカのアート、クラフトなどを扱っているような人たちですから、結局バザールになってしまうのですよね。上海万博でも愛知万博でもそ



うでした。ところが、いざ開会すると、それぞれの国のパビリオンを管理するために本国からスタッフがきます。途上国で展示に携わった経験がある人というのはその国の博物館の関係者しかいないので、万博の共同館に行くと、よく民博の研修の修了生たちに会うんですよ。

佐野  
吉田

それは、各国の博物館の知見を生かすという吉田先生のお考えが実現していたことですか。いえいえ。彼らが主体的に企画したものにはなっていないのです。

佐野

研修を修了した人が現場にいたというのは、その人が主体的に関わる余地はなかったけれど、単にスタッフとしていたことなのですか。

吉田

そうですね。だからいまみたいな状態でおいでいただくのはもったいないので、各国の博物館のキュレーターたちと一緒に展示を作って、それを博覧会へ持つていくという仕掛けにしていきたいと今回の博覧会に向けては訴えてきたのです。

佐藤

それぞれの国が何を見せるかというのは、その国のなかで委員会みたいなものを作ってセレクションをするわけですよ。

岩田

国によりまずけれど、基本的にそうですね。

佐藤

そこがすごく大きいポイントのような気がしています。ちょっと違う話をするようにですけど、三日前までタイにいました、たまたまバンコクでパッポン・ミュージアムというところに行つたのです。パッポンというのは西洋人が夜、遊びに行く風俗街です。そこに二〇一九年にミュージアムができて、パッポンの一九世紀以降の歴史をパネルやジオラマで展示していて、LGBTQ教育のセクションがあって、バーも併設されていて、すごくおもしろい。性風俗街の共同組合みたいな機能も果たしていて、観光客から集めたお金でワクチンを買って、

佐野

周辺のガードマンとかゴーゴーバーのお姉さんとかに注射を打つための段取りをするという、画期的なミュージアムでした。でも、タイが万博に出展するときは、ああいうところがとりあげられることはおそらくなくて、「わがタイ国は」という感じのものを出示してくるのではないかな。やはり、万博に出てくる前のセレクションの段階で、いかに多様なものをつくり上げるのが非常に大事なのではないかと思えます。

吉田

その議論は、遡って明治時代の日本が一九世紀の万博に一生懸命出たこととを考えると、その内容はアンもいろいろですね。一面から見れば国を挙げての努力なのですけれども、そこで表現されたものは日本のなかのいわば「上澄み」でした。各国の自己紹介としての展示を、国のなかのどういう階層の人たちが企画したかという要素も、万博を考えるもうひとつの補助線として興味深い着眼になりうるだろうと、ちょうどこのごろ考えていました。

ともあれ、独立のパビリオンをつくる国は、自分たちが表現したいものを表現できるのですよね。これは現代の話ですが、二〇一〇年の上海万博のとき、アンゴラは独立したパビリオンをもつていて、その内容はアンゴラの歴史を太古から現代までそれぞれの部屋を区切って展示したものでした。その区切り方が、民博の 아프리카展示の最初にある「歴史を掘り起こす」というコーナーとほとんど一緒だったのですよ。民博のその展示というのは、アフリカの八カ国の博物館や研究者にアドバイザーになつてもらつて、三年間毎年彼らと一緒にアフリカを回つて、また必ず日本に来てもらつて、展示の内容をディスカッションし、練り上げて作つたものです。だから、アフリカ人が自分たちでつくり出すとしている歴史が民博にできあがったのだけれども、アンゴラ館の展示はそれとほとんど同じ歴史区分によるものだったので。それは彼らの体験に基づき、アフリカの共通の歴史といえるものだろうと思います。



つまり、アフリカにそういうきつちりした展示ができる人たちがいるということなのです。そうしたトレーニングの場というのは世界中探してもなかなかなくて、先ほど述べた民博とJICAの研修コースは貴重なのですけど、そこでもわれわれが一方的に何か教えるというのではなしに、ここはフォーラムだとずっといつています。要は、世界中にあてはまる、モデルになる博物館の活動とかつくり方とかというのはないのだから、お互い良いところを盗み合いましょと。そういう活動からは、われわれのほうも学ぶことがいっぱいあるのです。

独自に自分たちで考えればそれだけのことをできる技術も才能も彼らは持っているのだけれども、共同館にした途端に、各コーナーにそれぞれの国を代表するとされている既成のものを置いて、あと、真ん中ではお土産を売っているということになってしまうのです。二〇二五年の万博ではそれを避ける手を考えてほしいということを書いてきました。

二〇二五年万博が早くからそういう方向へ向かっていたらよかったですね、私は現状を残念な気持ちで眺めています……。

佐野

二〇二五年万博に向けて

吉田

私はけっこういい方向にいらっていると感じていますよ。というのは、今回、地域分けの共同館をやめたそうです。同じテーマを掲げる国々で共同館を作るという方向だそうですね。

岩田

そうするつもりです。

吉田

それはいい発想だろうと思いますね。とくに今回みたいな「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマに対して、それぞれの国でこんなことを考えているという視点でまとめるならば、少なくとも、ここはアフリカです、オセアニアですといった、これまでの地域別共同館とは全然違うだろうと期待しています。それから、現地へ日本人が出かけて行って一緒に展示をつくったらいいと提案したのですが、先日お聞きした話だと、博覧会協会が途上国支援を提供する対象の国々から二人ずつをまず日本へ招く。で、テーマの共有をして、その上で現地へ帰って、それぞれの国でテーマに沿った展示を考えてもらう。そういうプランをおもちのようで、これはいい方向だと思っています。

岩田

「共同館問題」とここですっていますね、実は共同館が悪いということでもないのだと僕は思っています。今年の春に終わったばかりのドバイ万博では、初めてすべての国がパビリオンを持つことをやったわけですね。共同館は一切つくらなかったのです。おそらくドバイやUAEの政府がお金を出して、建物を全部つくってあげたのでしょう。でも各国のキュレーションをする人がいなければ、共同館で行われていた展示が単に大きくなっただけで、多様になるわけではないですね。だから、これまで現実に地域で一括りにして、なんとか共同館の問題として認識されていることは、実はそれぞれの途上国が何を見せるかという問題なのではないかなと思います。

佐野

共同館だから展示の質が悪いとは私も思っていないんです。最初に提起した意味での「共同館問題」は、かつて植民地展示の対象だった国々を、六〇年代になんとか万博の場に迎え入れようとして始めた共同館というものが、ほぼ固定化されて残り、いまだにそれらの国々を一括りにする仕組みになってしまっているという、



岩田 構造上の問題をいつているのです。ウスビ・サコさんが指摘されていたのもそういうことです。共同館であること、展示がお土産物屋さんになってしまうことは、自動的につながっているわけではないと思います。私たちがどういう共同館を二〇二五年に展開しようとしているかというところ、会場の敷地が狭いので、一カ国あたりに割り当てられる面積にすごく制約があるわけですね。一方で、広いスペースがほしい国と、狭くてもいいから出たい国とがあるわけです。広い面積はいいという国は別に途上国に限りません。これはもう、国の予算をいくら使おうかという話ですから。それで、いわゆる途上国ではないところも共同館に入るというスタイルを考えているんです。

佐野 それなら、ここで話してきたような問題が、少し解消されるでしょうか。

岩田 途上国の展示については吉田先生からもアドバイスをいただいで、これまでみなさんが失望してきたようなことにはならないように、チャレンジしています。

佐野 何をもちて優れた展示とするのかも、非常に判断が難しいものだと思いますが。

吉田 土産物屋が博覧会に向いていないというのは、土産物は消費の対象でしょ、だから消費者が求めるものがないに出てくる。その国の人たちが自分の国や自分たちの活動を伝えたいというものが出てくるわけではない。だから土産物屋になってしまったらつまらないですね。

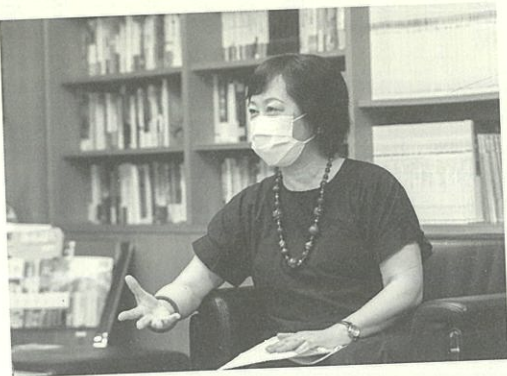
佐野 実は私は、その国の人から土産物屋をやりたいのだったら、それもありだと思っんですよ。誘致の段階から断続的に二〇二五年の博覧会に関わらせていただいで、大変気になったことがあります。日本は展示・制作を請け負うプロフェッショナルな業界がきわめて発達している国だと思いますが、議論のなかで折々に、日本で開催するからには各国に格好いい展示をさせてあげようという話が聞こえたんですね。要するに、日

本の制作会社に頼めばレベルの高いものに仕上げてあげる、という話なんです。このようなスタンスには疑問を覚えます。心からのものを表現する展示であれば、最先端技術を駆使するような展示のプロから見れば、格好悪くてもいいのではないかと。でももし、本当にやりたいことに対して経済的に追いつかないのであれば、ある程度手を差し伸べる。そういうスタンスでいいと思うんです。

吉田

佐野

日本のテクニックで展示を作り上げる必要はないです。私が今回の万博準備のごく最初の頃から、絶対に採用されるわけではないと思っながらいつてきたことがあります。それは、展示の技術というのは近年の万博では行きつくところまで行っってしまったので、ここはもう、人間に戻るしかないということ。お金のかかった展示は一切いらないので、パビリオンに入ったらその国の人を待っていてくれ、命というテーマをめぐってその国では何が問題かを話してくれ。その人を取り囲んで、来館者みんなであわあわいって議論する。次のパビリオンに行って、またその国の人と話す。もう本当に、人だけがいてくれればいい。そして、いまこんな話を聞いてきたら、万博会場のあちこちで人々が座り込み、そのまま話し込んでしまうみたい……。私はこれを「熟議型万博」といつて提唱しています。それでは展示業界が儲からなくなるからもういいわなでくれと、ある会議でいわれましたが(笑)。格好いい展示をめぐれば、やはり経済力の差が出る。人間を待っていつて話をする



佐野氏



だけなら、いちばん貧しい国にもできます。そして、人が話すことの価値には差がない。だから、私はこれが、現在のいろいろな不公平を乗り越えることのできる、新しい万博のひとつの形だと思っています。

積み重ねの先にある対等

佐藤　そもそも、いわゆる発展途上の諸国は、「万博をやりますよ、何か出しますか」というと、みんなが手を挙げてくるものなのですか、お金の話は別として。

岩田　きますね。すべての国というわけではないのですが。

佐藤　国際博覧会条約を批准していただろう基本は参加ということになるのですか。

岩田　批准とは関係なくて、批准してなくてもいいのです。博覧会国際事務局（BIE）という国際機関があるんですけど、そこに加盟してもいなくても、条約を批准してもいなくても主催国は招請状を出すことができます、それに応じた国が参加する。そして僕たち博覧会協会が契約を結ぶと参加になるのです。当然、呼びかけても出ない国もあります。

佐藤　それはその時々政治的な理由によるのですか。

岩田　いろんな理由があると思いますね。政治もあるし経済もあるでしょうし。

佐藤　やはり、われわれが議論の対象にしている途上国と呼ばれる国々の自発性とか、彼らが何を求めているのかとか、そういう観点が必要なのだと思いますね。ホスト側としてどういうことに配慮すべきか、何は望まし

くないかという議論はもちろんできるけれども、各国にそもそも何か見せたいものがあって、出たいとか出たくないとかという人たちがいて成り立つわけですよ。あとはお客さんの問題もあると思うのです。つまり大阪でやって、それを見にこられる人っていうのは当然限定されているわけで、アフリカの普通の村人が大阪にごそと来るとは思えないわけだから。

岩田　お客さんの八割以上が日本人となる想定です。

佐藤　もちろんそれを通じて、日本の人たちに世界のいろいろな国や地域の文化について情報を与えれば、対等性に近づく活動にはなるかもしれないけれど、日本で開催するという時点で、お客さんが自動的に限定される。本当に対等を目指すというのだら、もつと途上国で万博をやらないとだめですよ。

佐野　同感です。今回の特集に寄稿した論文には書き込めなかったのですが、最近、資料調査のなかでもしろうい発見をしました。植民地が独立し、途上国が徐々に万博の世界に入ってきた時期、具体的にはとくにその動きが加速した一九八〇年代のことですが、途上国側から、「参加できるよらになるだけでなく、開催できるようになることが、本当の意味で万博のサークルに入ることだと考えている」という非常に興味深い意見が出てくるのです。それを一気に実現するのは難しいですけども、この意見は万博の場に限らず、本当の意味での対等とはどういうことかというひとつの答えを表わしていると思います。それは、誰もがそれぞれの





佐藤 立場から「十全に発言できる」ということ、その意味において制約がないということだと、私は考えています。難しいと思うのは、対等とか平等とかということ、「どういう基準で？」とどうもどうしてもなるので、ここである種の序列化が始まってしまうのではないかと。僕は、さっきも申し上げましたけれど、基準を多元化・多様化して比べられないぐらいいろいろなものがあるというふうにするしかないと思っています。対等になるようにいまの秩序をひっくり返すという議論では、結局ひとつの競争軸みたいなものを立てなければいけなくなると、途端にまたそれに合わせるか合わせないかという話になってしまつて、元の見せかけの多様性の世界に戻つてしまう気がするのです。

佐野 どう工夫しても、何らかの形でそこに戻つてしまつて……。

佐藤 展示である以上、見てくる人が何を期待してくるのかを考えなければいけないので、企画する側がどこまで操作できるか、限界はあると思うのですけれど、とにかく「進んでいる、遅れている、簡単にいえないよね」「いろいろあつておもしろいね」という、多元化された方向へ持つていくことが、厳密な意味で対等の達成にはならなくても、ひとつの持つていき方なのかなと思います。

岩田 さきほど開催する国を増やしていくというお話がありました。たぶんそこだと思つてますよ。一昨年度は万博学研究会が出した論集『万博学』のサブタイトルは「万国博覧会という、世界を把握する方法」でした。万博において誰が世界を把握するのかというと、やはり第一義的に開催国なわけです。たとえば上海万博というのは、中国がいま世界をどう把握しているかがすぐわかる万博でした。日本は二〇二五年で六回目の万博を開催するのですけど、やはり日本が世界をどう見て、いまの地球規模、人類共通の課題をどう分類して、どうやって世の中に発信をしていこうかという、日本なりの目線で世界を把握するもの

になるわけです。それを多元化するためには、とにかくいろいろな国が万博を開催できるようにすることが必要だと思つています。

万博は開催するためのコストをなるべくミニマイズし、商業主義からはできるだけ離れようとしています。オリンピック・パラリンピックと比べると開催経費は実はそれほど高くないのです。私たちはこれから六カ月の万博をやりますけど、小規模な三カ月の会期の万博もあつて、それはもつと経費がかからな。二〇一七年にはカザフスタンが初めて開催しました。いろいろな国が参加するのをどう支援していくか、と。いうのもありますが、万博というものを、参加するだけではなくて開催する国として手を挙げたくなるようなものにどうやっていくか。万博を支えてきた各国が、そういう雰囲気や制度をどうつくつていくかというのは、すごく大事なことです。

佐野 歴史的に長い時間をかけながら、基準を多元化していくということですね。たとえばそうだと思いますね。一回の万博のなかでできることは限られているかもしれないけれども。たとえばASEANは、いまは一〇カ国ですが、最初からすごく強固なコミュニティをつくらうとしていたわけではないのです。少しずつ、この集まりだつたらどんな決め事をみんなのできるだろうかといながら、喧嘩別れしないことだけを目標にして、できることを一步一步積み上げてきて、それで社会実態や各国の国民の認識が少しずつ変化し、後追いで制度ができあがつてきた。やはり何かを達成しようと思つた強い意図と実績

の積み重ねがあつて、初めて世の中が動くのだと思つたんですね。いままでのBIEをずっと支えてきた諸国が、いま話してきたような方向へ向かおうという強い意志を持つていろいろなところで万博を積み重ねていくと、将来振り返つたときに、「あ、万博つてこんなに多元化した世界を体現できているんだな」といえる日



が来るような気がしますね。対等というのは、そういう積み重ねの先にあるのかなと思います。

佐野 そうした未来への歴史のなかに、二〇二五年の万博もあるわけです。

吉田 次の万博は、コロナ禍が地球規模で広がり、文字通り「命」が人類にとって共通の最大の課題であるという

経験をした直後の万博になります。「命」をテーマにしていたのは偶然だけれども、結果的に、この万博が成功したら何が残るかという、生命観や命に対する考え方だろうと思いますね。

佐藤 コロナは深刻な対等の問題を引き起こしましたよね。ワクチンの世界的な分布を見れば、まだ一回も打てない人たちが山ほどいるわけです。だから、そういう意味で新しい、命というテーマから対等の問題というの、われわれは直視しなくてはいけないと思います。

佐野 ドバイの万博はコロナ禍の真っ只中で行われましたが、その前に企画したものであったので、コロナの問題とはりあげられませんでした。いよいよコロナ問題が表に出てくるのが二〇二五年の万博ということになりますね。

歴代の万博についていえることですが、たとえば二〇二五年の万博が映し出し、歴史に刻むのは、実は二〇二五年の世界ではないのですよね。それに向けて必死に準備していた、その前の五年とか八年とかの世界が、そこに活写されるのです。ですから、成功したら何が残るかというお話がありましたけれど、万博が映し出す歴史を研究する立場からは、成功しなくてもおもしろい(笑)。こうして「対等」ということを一生懸命考えながら、実現できたこと、できなかったこと……いろいろな矛盾を解消できないまま抱えて、でも確実に、否応なく、歴史の一部として歩みを重ねているわけです。私たちが過去の万博を掘り起こしているように、一〇〇年後の歴史家が、この時代の私たちが右往左往する様子を分析してくれたり、二〇一〇年代の後半から二〇二五年に向かう日本と世界が見えてくるでしょう。それが、まさに万博学のおもしろさなので

す。今日は、このあたりにしたいと思います。お忙しいなか本当にありがとうございました。

(二〇二三年九月四日・於国立民族学博物館、写真・高野友美)

吉田憲司 よしだけんじ

国立民族学博物館長。文化人類学・博物館人類学専攻。京都大学文学部卒、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。学術博士。大阪大学文学部助手、国立民族学博物館助手、助教、教授を経て、二〇一七年四月から現職。主な著書に『仮面の世界をさぐる——アフリカとミニアムの往還』(臨川書店、二〇一六年)、『文化の「肖像」——ネットワーク型のミニアム』(岩波書店、二〇一三年)、『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミニアムまで』(岩波書店、一九九九年、第二回サントリ学芸賞受賞)など。

岩田泰 いわたやすし

公益社団法人二〇二五年日本国際博覧会協会経営企画室長。東京大学大学院経済学専攻。二〇〇九年から二〇二二年まで経済産業省博覧会推進室長として、二〇一〇年上海万博、二〇二二年麗水万博への日本政府参加を担当した。「上海万博・麗水万博日本館から見た日本の博覧会行政」(佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』思文閣出版、二〇一五年)、「国際博覧会の歴史に博覧会国際事務局(BIE)が果たした役割」(佐野編『万国博覧会』万国博覧会という、世界を把握する方法』思文閣出版、二〇二〇年)。

佐藤仁 さとうじん

東京大学東洋文化研究所新世代アジア研究部門教授。東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士課程修了(学術博士)。東京大学大学院新領域創成科学研究科国際協力学専攻助手、助教などを経て、二〇〇九年より現職。プリンストン大学国際公共政策大学院客員教授などを歴任。専門は、国際開発協力論。主な著書に『開発協力のつくり方——自立と依存の生態史』(東京大学出版会、二〇二二年)、『反転する環境国家——「持続可能性」の罫をこえて』(名古屋大学出版会、二〇一九年)などがある。

佐野真由子 さのまゆこ

一三四頁参照